

謎の真田丸、丸馬出は創られた虚像か

大坂冬の陣絵図にみる百間四方の堅壘 真田丸

1・まえがき

NHK大河ドラマ2016年「真田丸」上映に先立ち、大坂城真田丸が注目を浴びている。地形から場所を探ろうという動きも研究誌やネット上で盛んに行われている。富原文庫も上田市真田氏歴史館で一昨年、昨年と「真田氏の城郭と戦歴展」、「大坂冬の陣展」を開催し、今年も「大坂の陣展」で大坂冬の陣に描かれた真田丸絵図を展示している。真田丸のイメージとして定着しているのは丸馬出であり、簡単な出丸である。しかし、絵図にみる真田丸は様々な様相を呈している。丸馬出のような簡単な真田丸は誰が描きだしたのか。絵図の分析から解き明かしていきたい。

大坂城については昨年本誌で「大坂城絵図の種々相、特徴ある絵図群」として、豊臣大坂城本丸図、冬の陣仕寄り図、合戦屏風、元和徳川築城時の普請丁場割図、徳川大坂城絵図、修理絵図等を紹介した。当文庫には大坂関連古絵図、戦前市街地図数100点がある他、110点の大坂城絵図が収蔵されている。ただ、ほとんどが徳川大坂城絵図であり、前回紹介できなかった巨大な本丸山里丸修理絵図や御城代屋敷、御加番屋敷絵図、本丸御殿図、明治の算用曲輪弾薬庫図、大阪鎮台巨石図等66枚の彩色絵図、木版図を数える。「摂州大坂城天文2年本願寺光佐築き」とされる、本願寺大坂城絵図もあるが、今一つ、実像とかけ離れているような感じはぬぐえない。謎の**天満御要害図**とともに今後調査を試みたい。そして、残念ながら豊臣大坂城絵図の所蔵は先に紹介した本丸図のみである。しかしながら、大坂の陣絵図の内、冬の陣図には豊臣大坂城や真田丸が描かれる。大坂の陣絵図は**豊臣大坂城**、落城図、仕寄り図、城攻め陣形図があり、夏の陣図もあるが、**これらは今回対象としない**。これら13図を除き冬の陣絵図30図から、真田丸を眺める事にした。おそらく、紙上も実際も創めての企画である。豊臣大坂城研究も盛んに行われるようになっているが、真田丸に言及された物は意外と少ないし、その実像はまだよく解明されていない。唯一、絵図として残されているのが、広島浅野文庫の諸国古城之図に収録されている真田丸図で、その独立堡的な形状は出丸というよりも出城といえる性格である。其の構造は24間の広い空外堀で南方を遮断した東西80間程の**第二郭**と八間の浅い空内堀に囲まれた東西20間の**第一郭**とあり、ほぼ100間四方である。この大きさは後に記載する大坂冬の陣図の真田丸と共通するものであり、真田丸の大きさとして伝承されている規模が判明したことになる。南正面には虎口を設け、その部分のみ池となっている。東西と北は断崖で囲まれた要害の地であり、江戸中期、絵図が描かれていたころには、崖下は浅田と畑地となり、大和道が描かれているが、此の位置が当時の大坂城総構である。今回は、大坂冬の陣図に描かれた江戸期の兵法家による真田丸の姿を明らかにすることとした。

2・大坂冬の陣と真田丸

大坂の陣、大坂の役は慶長19年1614年の冬の陣と慶長20年1615年の夏の陣の総称であり、冬の陣の講和で豊臣大坂城は本丸を残して埋められたため、絵図によって真田丸を知ることが出来るのは大坂冬の陣絵図のみといえる。冬の陣は11月19日の開戦、大坂方10万、徳川型20万の籠城戦であった。一般に城攻めでは3倍の兵力が必要とされ、20万の軍勢で包囲されながら大坂城は直接の城攻めでは落城することなく、兵糧の不足や大砲の威嚇により12月20日、わずか1月ほどで和議が成立。真田丸を始めとする外構と外堀は埋め建てられた。翌年夏の陣では大坂城は裸城となり、5月7日大坂城は陥落した。豊臣方が戦争準備に着手したのが慶長19年10月であるから、真田丸の存続はその着工から数えてもわずか3か月足らずである。徳川政権が記憶から消そうとした真田の記録、真田丸は豊臣大坂城や真田氏の上田城ともに完全に抹殺された。そして、あるいはつくられた真田丸のイメージが残されたのかもしれない。

3・真田丸を丸馬出状に描く絵図

大坂冬の陣絵図の大半は真田丸を丸馬出として描く。ただ、その形状は城内側への通路の有無、城外側への東西虎口の有無等多岐に及んでいる。一般に丸馬出状であっても、通路としての虎口がなければ馬出とは言えない。単なる円形出丸である。ここでは、その詳細を検証したい。なお、図名記載無きは表示しなかったが、すべて内容は冬の陣絵図である。ここでは、真田丸から大坂城方向を城内、大坂城外郭線を総構と表現した。

A・大坂城総構の東南に総構を結ぶように円弧上に空堀と土塁を描き、大きさを「百間四方ナリ」と表示。城内総構北を城門と木橋で連結。城外南側に城門と木橋を描く。「真田丸、真田左エ門佐幸村五千騎」、六文銭旗印を描く。慶応2年8月吉日写図。此の図はイメージが異なるものの基本は木版図(3-C)の写しと考えられる。

B・総構から少し離れた位置に総構と同じ描写で、石垣で真田丸の東西南を固め、狭間付の土塀を巡らし、3方に2重櫓を描く。城外側は総構と真田丸石垣の間、東西の空間が虎口とみられる。城内側は離れて木橋が描かれる。文字の記載は見られない。

C・「大坂古城之図」というタトウに入った木版図が4枚、初刷後刷と用紙や体裁は変わるが内容は同一であり、タトウに「古来軒蔵売買不許」と記される。総構東南の堀石垣をへて真田丸を丸馬出状に描く、総構北と真田丸中央に城門と木橋、真田丸堀は総構堀に直結、東西の虎口は見られないため馬出ではない。「百間四方ナリ」と書かれる。「真田丸、真田左エ門佐幸村五千騎」とある。家康、秀忠の陣営は伏せ字になっている。忠実な写しが2枚あり、1枚に「此図世上流布不致者也可秘々々」と記入され、家康は「大」、秀忠は「新」と幕府を意識し、幕府下の豊臣関連資料忌避がうかがわれる。

D・「大坂関ヶ原柳ヶ瀬戦場図」と題する地図帳である。大坂の陣の各戦場を17枚の絵図に描き分ける詳細絵図であるが、真田丸については簡単に描画されているに過ぎない。総構東南より少し西に丸馬出を城壁と空堀によって描き、真田丸東西に喰い違い虎口と木戸、城内側に木橋と櫓門が描かれる。

E・表紙に「三十一ノ内参壱 大坂」と記される絵図群の一部である。真田丸を空堀で囲まれた丸馬出として描き、東西は堀を切るのではなく、薄く木橋で虎口とする。城内側に木橋と城門、空堀は総構に直結している。

F・「第十九号式枚の内」と付箋が付けられた「慶長十九年撰州大坂城攻守之図」である。真田丸の描き方はシンプルで、丸馬出状であるが、城内側は土橋、真田丸空堀は総構堀に直結、東西の虎口は見当たらないので馬出とは言えない。「真田出丸」と表示される。

G・「慶長19年冬陣備の写」と記される。城内側は土橋と城門、真田丸の土塀、狭間が総構堀を渡り、総構土塀に直結、真田丸には堀が描かれていない。作事のみで普請を無視した考えられない構造であり、書き漏れとも思われる。

H・「慶長十九年冬撰州大坂御陣之図 文化十三年六月写」と記される絵図である。「真田カ出丸百間四方東西二有り」と規模を示すが、図は城内側土橋、丸馬出に空堀、東西虎口は見当たらない。

I・「古戦略地図全 武家事紀卷二十八」と記される山鹿素行の古戦場地図集である。戦前の武家事紀には縮小され白黒で掲載されるが、戦後版には省略され、あまり知られていない。本地図集は彩色絵図で46古戦場絵図が細密に表現されている。大坂陣図は3図あるが、簡単に丸馬出を描くのみである。真田丸堀は総構堀と直結、城内側に城門、城外への東西虎口は描かれていない。

J・「大坂御城並持口之図」と記される。真田丸は土塁、空堀の丸馬出であるが、城外への虎口は東のみの片馬出である。真田丸の空堀は総構堀と直結し、城内側は喰い違い虎口となり、土橋で結ばれる。「真田」とのみ記入される。

K・「撰州大坂城攻 慶長十九年至二十年五月落城」と記される。総構東南の堀をへこませ、それをカバーするように丸馬出を構築、城壁土塀、正面東西虎口以外を空堀で防衛、東西虎口城門、城内側からは独立し、虎口はない。真田丸に2重櫓3基がみられる。

4・真田丸を本丸、二の丸、三の丸として描く絵図

真田丸を出丸としてではなく、大坂城総構から少し離れた独立した出城ととらえ、何れも東から真田本丸、二の丸、三の丸と三つの郭で形成されている。

A・「上冬の陣」と記され、「下夏の陣」と一組である。真田丸は総構から離れて、平野口と八丁目口の間位置し、東より真田本丸、二の丸、三の丸を描く。本丸に隅櫓2基、「真田本丸都合5千」と記され、全体に断崖上切岸があり、空堀は描かれていない。城内側に少し離れて木橋が設置される。真田丸と総構堀との間に防衛遺構は描かれていない。

B・「大坂冬御陣之図二枚之内」と記され、夏の陣図と組み合わせられていたと想定される。真田丸は総構から離れて描かれ、東より真田本丸、二の丸、三の丸を描く。本丸に東南に隅櫓、土塀、狭間、二ノ丸、三の丸に木塀、本丸に「真田本丸都合人数五千」と記され、独立して城壁切岸があり、空堀は見られない。城内側総構堀に「出丸通橋」と記される。

C・「金城古図全」とあり、真田丸は総構南に直結し、平野海道西に巨大な郭を石垣で構築、その中に東から真田本丸、二の丸、三の丸を記載。本丸は東、南を土塀と狭間、南に

2基の3重櫓、二ノ丸三の丸は木堀で西、南を囲う。城内側は水堀、木橋でつなぐ、城外側は高石垣のみ、空堀は描かれていない。

D・美しい絵図であるが北半分がなく、南半分のみ残された絵図である。真田丸は高い城壁切岸の上に東から真田本丸、二の丸、三の丸と描かれ、本丸東西に矢倉、総構との間に「合数5千人」、真田本丸に「真田本丸ハ老士」と記される。城内側に離れて2基の木橋、城門がある。

E・「大坂冬の陣絵図」、真田丸は独立城郭のようで真田本丸、真田二ノ丸、真田三の丸が構築されるが、同時に総構との間に「真田丸横通道也」と記される通路があり、左右に城門を設け、角馬出の要素も兼ねている。真田本丸東南に一重櫓、西南に二重櫓があり、城内側断崖上に二層の物見櫓を設ける。東南櫓西に隠れて城外への城門を設置している。城内建物も本丸に二基、二ノ丸、三の丸に1基描かれ、郭の大きさも本丸二丁四方、二ノ丸、三の丸各一丁四方と記す。本丸、二の丸、三の丸外周と郭間の仕切りも石垣と土堀で構築され、狭間が設けられている。本丸に手勢百二十人と記し類書と異にする。東西南三方は断崖である。総構堀を平野口枡形南まで延長し、真田丸東の水堀に直結している。このあたりの堀の取り合いは本絵図特有のものといえる。城内側も総構前通路との間が断崖となり、独立性を顕著にしている。東に城内の平野口枡形を配し、枡形から城外への木橋を真田丸からの横矢で防衛している。城内側の総構堀は真田丸対応の箇所のみ堀巾を狭くし、城内側に木柵、四か所の木橋を設置、平野口枡形に城門が二基あり、「平野口横槍ノタメ」と記される。真田丸絵図中もっとも特異なものである。

5・真田丸を角馬出として描く絵図

大きく見れば角馬出といえるが、折を設けたり、形状は多岐に及ぶ。

A・「冬御陣」とのみ記入。真田丸の形状が横矢を巡らし4ヶ所で折れている変形。城内側は土橋、城門、城外側は真田丸西にのみ城門があり、全体を空堀、東の総構側で堀が途切れるのは、描かれていないが、東にも城門の可能性。真田丸上部は東半分は土塁があり、西には見られない。「真田左衛門幸村父子」と記される。

B・「慶長十九年十一月十二月大坂冬御陣図」と記される。ほぼ5Aと同じである、真田丸は横矢を巡らし4ヶ所で折れている変形。城内側は東によって土橋、城門、真田丸東西に虎口城門、全体に空堀がり、変形角馬出といえる。

C・「非売品大坂冬陣東西両軍配布之図」明治に歩兵第二十連隊将校団によって作成された銅版地図2種である。銅版地図はあまり残存していないが、多くの復刻版が作られよく知られている。真田丸は東南、西南の角を取った五角形の角馬出として描かれている。城内側は木橋、真田丸は石垣、東西に城門、南正面に3重櫓が描かれる。

D・「大坂城の旧図」昭和3年印刷、手彩色された印刷図。真田丸は総構東南部の直線状の外に描かれ、城内側は城門のみ、橋の記載はない。真田丸は総石垣造り、三か所で折を設け、東西に城門、正面中央に3重櫓があり、東の城壁が長く、西の城壁が短い変形角馬出となっている。

E・「古城図」とのみ記される木版色刷の絵図である。佐名田出丸とあり、総構東南角に水堀、土堀、3か所の城門と木橋を描く。方形であるが、城内側に虎口はなく、馬出とは言えない。

6・まとめ

以上3種21項目26枚の絵図を見てきたが、これ以外に真田、伊木とか、出丸と位置のみ描かれた絵図4種があり、多くの想像図も描かれている。手元にはないが、これまで見た冬の陣図では真田出丸を角馬出とし、正面に3重櫓、総構城内側に3重櫓2基、2重櫓5基、を備えた巨大な内柵形を描いたものもある。多くの絵図からは、おぼろげながら百間四方で5千人が守備した真田丸の姿が浮かび上がる。

これらは軍学上の伝来図であり、又、真田丸を描く目的で残された絵図ではない。ただ、江戸期に大坂冬の陣図がどのように伝承され、真田丸がどう伝えられてきたか。江戸の兵法の感性、武士のにおいのする資料群であり、分類整理の必要があると感じていた。大河ドラマを機会に分類検証を試みた。豊臣大坂城は現在の大坂城の地下に埋没させられた。真田丸も市街地に埋もれ、その痕跡を地上にほとんどとどめていない。上田城も仙石氏の上田城であり、真田氏の上田城は謎に包まれたままである。

冒頭に感じた真田丸の疑問は、大半を占める丸馬出であり、唯一、江戸期に伝承した木版絵図と其の大量写し絵図である。これらは徳川幕府が真田のイメージを消すために、豊臣大坂城や真田の上田城を消したように、真田丸が取るに足らない簡単なものと流布した結果ではなかろうか。堅塁を表す複雑な角馬出状遺構や真田本丸以下の出丸というよりも出城に真田丸の本当の姿が見えてくるように思えてならない。文献や当文庫所蔵以外の絵図、現地調査は今回考慮に入れていない。あくまで、富原文庫所蔵冬の陣絵図から見た真田丸である。**ただ、あまりに技巧を凝らした構造には江戸時代の軍学者による創作と思われる一面も否定できない。**